〈研究ノート〉

文学のなりたち（一）

坂野信彦

第一章　文学とは何か

1　「文学」の語義

文学のなりたちを考察するにさきだって、まず、考察の対象について、できるだけ厳密な概念規定をしておかねばならない。ただし、概念規定の厳密さとは、規定が細かく精密であることをかならずしも意味しない。むしろ逆に、規定がゆるやかでおおざっぱであってこそほんとうの厳密さを獲得しうることも多い。文学のばあいにもそのことがいえる。

「文学とは何か」という古くて新しい問題には、じつのところ唯一の絶対的な解答といったものはありえない。というのは、なにを「文学」とよぶかは、社会集団によって相対的にのみ規定されるからである。それはまた、さらに個人の私的な習慣にも大きく依存している。それゆえ、文学というものの内容や範囲は、けっして一定のものではない。より分析的にいうならば、「文学」という語と、それによって示される対象との関係は、あるていど恣意的なも

のなのである。

私たちがつねづねあたりまえのように用いている「文学」という語は、歴史的にみると、すこぶる多様な意味において用いられてきている。明治時代のなかば近くになるまでは、それは本稿で考察の対象としているもののような意味において用いられることはなかった。あるばあいには、それは儒学の経典などの文章を意味する語として用いられた。またあるばあいには、そうした文章を学ぶこと、ひいては学問そのものを意味する語としても用いられた。もともと「文学」の語は中国からつたえられた外来語で、がんらいが六芸を学ぶことを意味する語であった。

現代においても、「文学」の語の用いられかたは、かなり多様である。おなじ「文学」の語によって、ある人は文章や書物そのもののことを示していたり、また別のある人は文章作法とか文章読解法のようなものを示していたりする。もっと一般的なのは、「文学」を学問の一分野の名称として用いることである。大学の文学部とか文学博士などというばあいには、「文学」とは法学や経済学をのぞく文科系の学問分野についての名称である。文学部文学科というばあいには、もっと狭く国文学や言語学などの学科をさす。このばあいの「文学」は、文章にかんする学問といったほどの意味である。また、しばしば文学者という言いかたがなされているけれども、たんに文学者といっただけでは、作家のことなのか文学研究者のことなのか、はっきりしない。

「文学」の語には「学」という字が用いられているし、学校では文学は国語の試験問題のもっとも大きな部分をしめている。大学の一般教育科目のなかにも、哲学や社会学などとならんで「文学」と称する学科がある。とうぜんながら学生たちのなかには、文学を学問の一種と心得ている者が多い。筆者が「文学」なる学科を教えている学生の書いた文章を引用してみよう。両者とも「文学と私」というテーマの課題文のなかの一節である。

私と文学との関係はなんにもないようだ。私の今までしてきたようなことは、文学と呼ばれているような学問

とはかけ離れていると思うからだ。

（法学部一年・男子）

文学といっても、私が専門に勉強しているわけではないが、小学校から今に至るまでなんとなくやって来た。今まで学んで来て文学とはいったい私のなんだったのかと考えてみると、自分の人生の中に入り込む学問だと思う。他の学問をとってみると、例えば数学・英語をとっても、通り一ぺんの公式をそのまま覚えるだけで、自らの人生のしげきも得ることができず、また心のささえになるわけでもない。

（体育学部二年・男子）

さすがに数学などとは異質な「学問」であるとは感じているけれども、文学とは勉強して学びとるべきものだという理解が基底にある。このような文学観は、「文学」という名称や学校教育における文学のあつかいかたなどとともに、文学そのものにかかわる一般的な慣習とも深くかかわっているものと思われる。この点についてはのちに考察することにする。

ところで、本稿が考察の対象とするところの「文学」は、もっぱら literature や littérature の訳語としての文学である。literature の訳語としての文学――といってみても、しかしかならずしも「文学」の語のあいまいさが解消されることにはならない。そもそも literature という外国語そのものの語義が、かなりばくぜんとしているのである。英語の literature や仏語の littérature はラテン語 littera を語源としている。littera は英語でいえば letter（文字）である。ここから literature は、おのずから文字に関係のあるさまざまなものを意味することになった。それは、あるばあいには文章のことを、あるばあいには書物のことを、またあるばあいには学問のことを、それぞれ意味した。だから literature の訳語としての文学といっても、それだけではまだ「文学」の語の意味が明確になっ

たとはいいがたい。

とはいえ、△literature の訳語としての▽というただし書きが決定的な意味をもつこともまたたしかである。というのは、本稿であつかうような文学の概念は、訳語としての「文学」の語をつうじてはじめて、わが国にもたらされたものであるからである。訳語としてもほんらい多義的であっていいはずの「文学」の語が、現在では詩や小説などにかんして用いられることがもっとも多くなっているのは、邦訳された英文のなかの literature の語じたいの用いられかたにもよるし、訳文をはなれたこの訳語の普及のされかたにもよる。いずれにしても、私たちの用いる「文学」の語が literature の訳語であるという事実は、文学の概念規定にとってきわめて重大な意味をもつといわねばならない。

辞書の記述もこの点を考慮しているものが多い。たとえば『広辞苑』をひらいてみると、次のように記してある。

〔文学〕①学問。学芸。文章。②大宝令で有品親王の家に置いて経(けい)を講じた職。③江戸時代に、諸藩の儒官の称。④(literature) 情緒・思想を想像の力を借り、言語または文字によって表現した芸術作品。即ち詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など。文芸。⑤自然科学及び政治・法律・経済などに関する学問以外の諸種の学問。純文学・哲学・史学・社会学・言語学など。

このなかで、literature の訳語としての「文学」を「文芸」という語でいいかえているのが目につく。してみると、あるいは「文芸」という語のほうが本稿であつかうような文学の名称としてふさわしいのではないかとも思われてくる。じっさい、「文学」の語のかわりに「文芸」の語を用いている学者もすくなくないし、新聞の「文芸時評」とか雑誌の「文芸欄」とか学校の「文芸部」など、一般にも「文芸」の語がしばしば用いられている。では「文芸」の語なら、その意味がはっきりするだろうか。残念ながら、けっしてはっきりはしない。「文芸」の語は、「文芸復興」

（ルネッサンス）というばあいのように広く学芸一般にかんして用いられるばあいもあるし、単独で用いられるばあいには「文学および芸術」という意味であることも多い。それに、「○学」よりはましだとしても、「○芸」というのも、民芸とか手芸などを連想させて、ややそぐわない感じをともなう。けっきょく、「文学」も「文芸」もどちらもあまりすっきりしないのである。それなら、literature の訳語として一般に用いられてきた「文学」の語を採用するほうが、いまのところはより自然であるということになろう。以下すべて「文学」の語を、literature の訳語としての意味において用いることとする。

2　文学の基本概念

文学を定義づけようとする試みは、古くから、多くの学者によってなされてきている。けれども、万人に納得のゆくような文学の定義がどうしてもあらわれない。すぐれた英文学者でもあった夏目漱石は、西洋の文学者たちが文学をどう定義したかを引用によって列挙したうえで、次のように述べている。

以上に掲げたる諸定義は、その何れにも尤もらしく思はれる点のあると同時に、又何れも物足らない感じがする。然らば文学を如何に定義し、如何に解説して宜いか。元来文学と云ふ文字には各人が勝手の見地から勝手の意義を与へることが出来るものであるから、甲の人の考と、乙の人の考とは、相合致する場合もあり、相容れない点も出来て、此を遺憾なく定義し得たものなく、又遺憾なく述べ得るやう、文学と云ふ文字が明確に使用せられてはないのである。

（「英文学形式論」明治三十六年）

文学を明確に定義づけようとすることは、すなわち文学の領域を一定のワクのなかに限定することを意味する。文学を明確に定義づけようとすることは、したがって、文学に属するものと属さないものとを、あるひとつの観点から

ふるいにかけてしまおうとすることにほかならない。そこに無理がともなう。

詩や小説が文学の領域にあることにはだれも疑問をもつまい。しかし、ルポタージュ、歴史記述、哲学や宗教にかんする著述、漫画……となると、どこからどこまでが文学の領域に入るのか、はっきりと判定することは困難になる。『万葉集』や漱石の『こゝろ』が文学の領域にあることにはだれも疑問をもつまい。しかし『古事記』や『日本書紀』、『歎異抄』、『学問のすゝめ』、『禅の研究』……となると、どれとどれが文学の領域に入るのか、はっきりと判別することは困難になる。西洋の文学史にでてくるマキャベリの『君主論』やルソーの『社会契約論』はほんらい社会科学関係の著述であるし、ファーブルの『昆虫記』は「昆虫の本能と習性の研究」という副題をもつ生物学上の著述である。文学史家によっては、ダーウィンの『進化論』やマルクスの『資本論』でさえも文学作品とみなしている。こうしてみると、文学の領域に入るものとそうでないものとの区別は、きわめてあいまいであるということがわかる。むろん、あえて個人的に取捨選択して区別することも可能である。が、それはあくまで個人の独断と偏見による主観的判断にすぎないものであって、他人におしつけることのできるようなものではない。

文学の範囲はけっして一定しているものでなく、個人の主観によっても左右される。けれども、そのいっぽうでは、だれもがなんの疑問もなく文学と認めるようなものもたくさんある。だから文学の範囲がいかに主観的であるとしても、そこにはなんらかの中核的な文学の概念が潜在しているはずである。詩や小説が文学に属することはだれもうたがわない。それは詩や小説が、社会的な（現在ではあるていど国際的な）慣習、いわば制度としてさだめられた、文学上のジャンルの代表となっているからである。「文学とは何か」という問題は、まずそうした文学上の代表的なジャンルに共通する性質をとりあげることによって、解答のてがかりをつかむことができるだろう。

一見してあきらかなように、詩や小説など文学の領域にあるものはすべて、言語ときりはなすことができない。う

たがいもなく、言語は文学のもっとも基本的な要素である。言語なしに文学がなりたちえないことは明白である。ところが、言語はまた、人間社会のほとんどあらゆる文化現象の中枢に位置するものでもある。言語は人間の本質であるとさえいえる。文学は、言語によって成立する広汎な文化現象のなかの、ほんの一部分であるにすぎない。しかし文学は、その広汎な文化現象のなかにあって、言語そのものにとりわけ深く結びついているといえる。

詩歌にしても小説にしても、私たちはつねに言語そのものと直接かかわりあわなければならず、しかも言語いがいの表現手段（たとえば絵画、楽曲など）には無関係であるか、もしくは副次的にしか関係していない。物語が絵巻とともに鑑賞されたり、詩歌がふしまわしつきで朗詠されたりするばあいでも、ほんすじはあくまでも言語表現のほうにある。もしこの比重が逆転するならば、それらは美術や音楽の領域に入ってしまうことになる。言語を主要な媒体とするという点で、文学は、美術や音楽や映画やテレビ放送などと異なった範疇に属するものとみることができるわけである。すなわち文学は、いわゆる言語文化といわれるもののひとつとみることができる。言語文化のひとつといえば、あるていど範囲がせばめられたことになろう。しかしそれでも、「言語を主要な媒体とする」という条件は、政治演説や法廷の弁論や労使の団交や大学の講義などでもじゅうぶんに満たしている。主婦たちの井戸端会議でさえ、まぎれもなく言語文化の一部をなすものである。

それでは文学は、どういう点で他のもろもろの言語文化から区別できるのであろうか。いいかえれば、文学を他の言語文化から区別する目安となるものはいったい何なのだろうか。ここで思いおこされることばに、「言語芸術」という熟語がある。このことばは、しばしば「文学」の語のかわりに用いられている。大学で使用されている文学の教科書のなかにも、『言語芸術』という名のつけられたものがある。「言語芸術」ということばが、「文学」のかわりとして、さしたる抵抗もなく用いられているということは、このことばが文学というものの本質的な性格をあるていど

言いあてていることを示していよう。「言語芸術」という熟語は、いうまでもなく「言語」という語と「芸術」という語を組み合わせたものである。「言語」の「芸術」という意味合いにおいて、「言語芸術」ということばが用いられている。ということは、言語的性格と芸術的性格とが結びつくところに、「言語芸術」なるものが成立するということである。したがってもし、文学＝言語芸術という関係がなりたつのであれば、文学とは言語的性格と芸術的性格とをかねそなえたものである、という命題がなりたつことになる。現実に、「文学」を「言語芸術」といいかえることが可能である以上、この命題は基本的にまちがってはいまい。少なくとも、「文学とは何か」を考えるうえで、この命題が決定的な有効性をもつであろうことはたしかである。そこで、しばらくこの命題のうえにたって考察を進めることにしよう。

文学は、いっぽうで言語的性格をもち、同時に他方で芸術的性格をもつ。その点で、文学は他のもろもろの言語文化から区別される。文学を他の言語文化と区別する目安となるものは、芸術的性格をもつという要件である。「言語芸術」ということばをぬきにしても、それいがいには考えようがないと思われる。

＊

主として言語と直接かかわりあい、しかも芸術的性格をもつもの、それが文学である。――このように表現すると、それで文学というものの概念がかなり明確にされたように感じられよう。ところが、「芸術的性格」というものの実体がなんであるかを少しでも反省してみるならば、ただちに「芸術的」なるものがいかにあいまいなものであるかに気づかざるをえなくなる。「文学」にもまして「芸術」とか「美」とかの概念はばくぜんとしている。芸術や美は、それを明確に定義づけようとすればするほど、定義する者の独自性や恣意性に深くゆだねられてしまうことになる。そこで、ここでは「芸術」の定義の問題にひっかかることなく、芸術的性格に共通する特性をひきださなければ

ならない。

芸術的性格というと、それはあたかもなんらかの客観的対象そのもののもつ性質についての指摘であるかのように思える。たしかに、なんらかの対象に関係するものであるにはちがいない。しかしそれはけっして対象そのものだけにかかわるようなものではない。なぜなら、同一の対象がつねに同一の芸術的性格をもつとはかぎらないからである。同じ対象が、それに接する人の感じかたしだいで、芸術的であったりなかったりするのである。ある人にとってはすぐれて「芸術的」な演奏が、他の人にとってはただの雑音としか感じられないといったことは、ごくありふれた現象である。だから、芸術的性格をもつという言いかたは、対象のもつ性質についての指摘というよりも、じつはむしろその対象にたいする主体じしんの主観的な判断を語るものと考えなければならない。

芸術的性格なるものは、特定の主体がなんらかのものを認識することによって、「芸術的」とよぶにあたいするような心理的体験をなすところにのみ、たちあらわれる。それゆえ、すべて芸術的性格といわれるものは、まず第一に、主体が対象を認識することによって得られた心理的体験の性質に依存する。そして第二に、その心理的体験の性質についての価値判断にも依存する。このことは、芸術的性格なるものがきわめて相対的なものであるということを意味している。

同一の事物に接することによってひきおこされる心理的反応が、時代や社会や個人によってさまざまに異なることはいうまでもない。人それぞれに先行経験が異なる以上、心理的反応の個人差は必然である。だから、主体が対象を認識することによって得られる心理的体験の性質は、つねに相対的である。また、いかなる性質の体験を「芸術的」と判断するかという点には、判断の規準として、特定の芸術観や美意識が前提とされなければならない。ところが芸術観や美意識といったものほど、時代や社会や個人によってまちまちであるものも、またとないのである。だから、

かりに心理的体験が同一であると仮定しても（現実にはありえないことだが）、それにたいする価値判断が相対的なものとなることはさけがたい。こうして、芸術的性格なるものは二重に相対的であることをつねに強いられているのである。端的にいえば、芸術的性格なるものは人間の主観のなかにしか存在しない、といわねばならない。すくなくとも、古来の素朴な芸術学者のように、芸術的性格というものを、事物のもつ属性とみなし、人間の主観から独立して存在するものとみなすことは、根本的に不可能なのである。

芸術的性格とは、主体のもつ心理的体験の、ある特殊な一様相についての総称にほかならない。芸術的性格の実体とは、主体における心理的反応のひとつの特性なのである。芸術的性格の一般的な特性は、その「心理的反応のひとつの特性」のなかにもとめられなければならない。すなわち、ひとびとが「芸術的」なものを感じとるときに、彼らの頭のなかで共通に生じている心理的反応こそが、芸術的性格というものの一般的特性なのである。ではそれはいかなる心理的反応なのであろうか。

ここでその心理的反応の具体相を規定することは不可能である。しかしごく基本的な次元で、ある特性を抽出することは可能であろう。「芸術的」なものを感じるとき、私たちはつねに、なんらかの趣味を感じている。なんらかの興味を覚えたり、面白いと思ったり、楽しさを感じたり、しみじみと感銘を受けたりする。その実質は無限に多様であるけれど、そうした心理的反応こそ芸術的性格の要となるものといえるだろう。ここではそれらを総称して「感興」とよぶことにしよう。いかなる性質の感興であるかを具体的に特定することはできないけれども、一般に、なんの感興もおこらないところには、なんの芸術的性格も感じられないだろう。なんらかの感興がひきおこされるところにのみ、ひとは「芸術的」なものを感じる。感興という心理的反応において、芸術的性格は出現するのである。

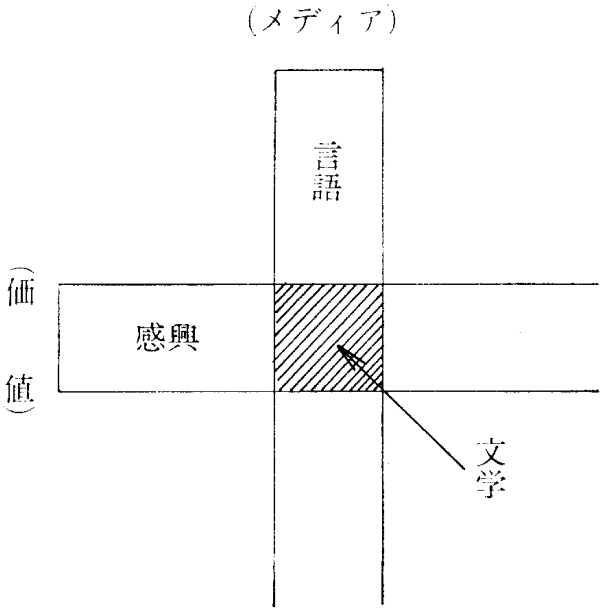
「感興」という語は、心理学上の術語でもなく、その語義はきわめてばくぜんとしたものでしかない（ちなみに、

『広辞苑』には「感じて興に入ること。面白がること」とある）。しかしここではそれがかえって好都合なのである。もしこれ以上に細分化された概念を採用しようとすれば、私たちはたちまち芸術観の問題という相対的な領域にまよいこまざるをえなくなるからである。ただ、「芸術的」というのは一種の価値概念であるから、感興そのものがつねに価値をともなうものでなければならない。いいかえれば、ここでは感興は、主体の経験を特色づけ価値あらしめるようなものでなければならない。芸術上の価値そのものが、感興にもとづくわけである。感興は、それがおきさえすればよいというような付随的なものではなく、芸術的性格の中心となるような本質的な現象としてとらえられなければならない。芸術や文学を考察するうえで、このことはきわめて重大な意味をもつはずである。そこでここでは、芸術的性格の一般的な特性を、「感興が本質的な意味をもつ」というふうに把握しておくことにしよう。

感興は、付随的な要素ではなく、文学そのものの成立や価値を根底から左右するような、本質的な要素とみなさなければならない。そうでなければ、文学をささえる二本の柱のひとつとして、芸術的性格をとりあげたことが無意味になってしまう。文学において感興は、かけがえのない中心的な位置をしめるものといわねばならない。それは、主体において生起しなければならないばかりでなく、主体の経験じたいに価値をあたえるようなものでなければならない。

さて、これで、「文学とは何か」という問題にたいして、もっとも基礎的なレベルでの解答をあたえることが可能となった。すなわち、文学とは、**言語を主要なメディアとし、かつ感興が本質的な意味をもつ**、そのような現象である。

これを図で示してみると次のようになる。



〈文学の領野〉